

注 2. 同一日に行われた心電図検査は負荷心電図検査の点数に含まれる。

D211-2 喘息運動負荷試験800点

注. 喘息の気道反応性の評価, 治療方針の決定などの目的のために行った場合に算定する。

○ 喘息運動負荷試験は一定量の運動負荷をかけてから運動後の時間を追って呼吸機能を観察する。 [新点数運用 Q & A 平成22年]

○ 負荷試験と共にネブライザーや経皮的動脈血酸素飽和度測定を実施した場合には要件を満たせば算定できる。 [新点数運用 Q & A 平成22年]

D214 脈波図, 心機図, ポリグラフ検査
 1. 2 検査
 2. 3 又は 4 検査
 3. 5 又は 6 検査
 4. 7 検査以上

注 1. 数種目でも, 同時記録の最高検査数による。

注 2. 記録した心電図検査は, 検査数に数えない。

〔超音波検査等〕(D215, 216の検査で同一月の同一検査は, 2回以降90%)

D215 超音波検査(記録に要する費用を含む)同一部位に同時に2以上の検査を併用しても, 主たる検査を1回算定。同一方法は部位数にかかわらず1回のみ算定。

1. Aモード法150点

2. 断層撮影法(心臓超音波検査を除く。)

ロ. その他(頭頸部, 四肢, 体表, 末梢血等)350点

注. 2で造影剤を使用した場合は150点を加算する。この場合造影剤注入手技料及び麻酔料は算定できない。

D216 サーモグラフィー検査(記録に要する費用を含む)(負荷検査は種類に拘らず+100点) …200点
 〔監視装置による諸検査〕

D220 呼吸心拍監視 1. 1時間以内1時間につき50点
 2. 3時間を越えた場合 イ. 7日以内(1日)150点

D222 経皮的血液ガス分圧測定 1. 1時間以内1時間につき100点
 2. 5時間を越えた場合(1日)600点

D223 経皮的動脈血酸素飽和度測定(1日)30点

◇ 経皮的動脈血酸素飽和度測定は, 以下の各要件のいずれかの場合に算定する。

ア. 呼吸不全か, 循環器不全か, 術後かの患者が酸素吸入を現に行っているか, 酸素吸入を行う必要のある場合又は, 突発性難聴に対する酸素療法を現に行っているか, 酸素療法を行う必要のある場合。

イ. 静脈麻酔, 硬膜外麻酔又は脊髄麻酔を実施中の患者に行った場合。

なお, 閉鎖式全身麻酔を実施した際にL008マスク又は気管内挿管による閉鎖循環式全身麻酔を算定した日と同一日には算定できない。

D223-2 終夜経皮的動脈血酸素飽和度測定(1連)100点

◇ 睡眠時呼吸障害の疑われる患者に行った場合に算定し, 数日間連続して測定した場合でも, 一連として算定する。

○ 一連とは診断が確定するまでの間のことである。 [疑義解釈 H18. 3. 20]

D226 中心静脈圧測定(1日) 1. 4回以下100点 2. 5回以上200点
 注. カテーテル交換の有無にかかわらず一連

D232 食道内圧測定検査650点
 〔脳波検査等〕(判断料140点: D238)

D235 脳波検査(過呼吸, 光, 音, 刺激による負荷検査を含む)600点

注 1. 睡眠・薬物賦活検査を行った場合, 検査の別にかかわらず+250点

注 2. 他医療機関の描写した脳波の診断は1回につき70点

D236 脳誘発電位検査 { 脳波検査を含む。刺激又は負荷を加えながら脳活動電位を記録し, コ
 ンピュータ等により解析を行う。同時に記録した脳波検査は算定せず。 }

1. 体性感覚誘発電位670点 2. 視覚誘発電位670点

3. 聴性誘発反応検査670点
3. 脳波聴力検査	2種類でも1種類で算定。
3. 脳幹反応聴力検査	誘発反応聴力検査 ERA, 脳波聴力検査 EEG,
3. 中間潜時反応聴力検査	聴性脳幹反応 ABR, 中間潜時反応 MLR
4. 聴性定常反応	
D236-3 神経磁気診断5,000点
(1) 神経磁気診断は原発性・続発性てんかん, 中枢神経疾患に伴う感覚障害や運動障害の患者の手術部位の診断や手術の選択方法を行う場合に, 手術前に1回のみ算定。	
(2) 明細書の摘要欄に手術実施日か手術予定日を記載し, 手術が未実施なら摘要欄に理由を記載する。	
◇ 神経磁気診断に3年以上の経験の常勤医師が1名以上で, 他の医療機関から診断の依頼がある場合には, 施設基準を地方厚生局に届け出る。	
D237 終夜睡眠ポリグラフィー 1. 携帯用装置使用720点
ア. 問診, 身体所見, 他の検査所見から, 睡眠時無呼吸障害が強く疑われる患者に, 睡眠時無呼吸症候群の診断を目的で使用した場合に算定する。	
イ. 鼻呼吸センサー, 気道音センサーによる呼吸状態及び経皮的センサーによる動脈血酸素飽和状態を終夜連続して測定した場合に算定する。この場合にD223-2 経皮的動脈血酸素飽和度測定(一連)の費用は算定できない。	
ウ. 数日間連続して測定した場合でも一連として算定する。[一連: 診断が確定するまで]	
エ. 診療録に検査結果の要点を記載する。	
D237 終夜睡眠ポリグラフィー 2. 1以外の場合3,300点
ア. 睡眠中無呼吸発作の患者に対して睡眠中無呼吸症候群の診断を目的として行った場合及び睡眠中多発するてんかん発作の患者又はうつ病かナルコレプシーであって, 重篤な睡眠, 覚醒リズムの障害を伴う患者に行った場合には, 1月に1回を限度として算定する。	
◇ C107-2 在宅持続陽圧式呼吸療法指導管理料を算定している患者は, 治療の効果を判定するため, 初回月に2回, 翌月以後1月1回算定できる。	
◇ この検査を実施するには, 下記の「イ」～「ニ」に掲げる全ての検査(睡眠時呼吸障害の疑われない患者は「イ」のみ)を患者の睡眠中に8時間以上連続して測定し, 記録する。	
イ. 脳波, 眼球運動及びおとがい筋筋電図	ロ. 鼻又は口における気流の検知
ハ. 胸壁及び腹壁の換気運動記録	
ニ. パルスオキシメーターによる動脈血酸素飽和度連続測定	
(2) 脳波等の標準記録速度は毎秒1.5cm以上とする。	
(3) 同時に行った検査で, 呼吸循環機能検査等, 超音波検査等, 監視装置による諸検査, 脳波検査等に掲げるもの, 筋電図検査などは, 併せて算定できない。	
(4) 測定開始後に, 患者の覚醒等やむを得ない事情により, この検査を途中で中絶した場合は, 中絶までに施行した検査に類似した検査項目で算定する。	
(5) 診療録に検査結果の要点を記載する。	
編注: 平成16年度から歯科で睡眠時無呼吸症候群に対する口腔内装置治療が評価された。医療機関は脳波を含む精密な終夜睡眠ポリグラフィー(Poly Somno Graphy)で, 睡眠時無呼吸症候群と確定診断した患者を歯科へ診療情報提供書で紹介する。	
	資料(8-3)を参照
○ D237の2 終夜睡眠ポリグラフィーは, 他の簡易検査(D237-1 終夜睡眠ポリグラフィーとかD223-2 終夜経皮的動脈血酸素飽和度測定等)で, 睡眠中無呼吸発作が明らかな患者に対してのみ算定可能である。	[疑義解釈H18. 3. 31]
D237-2 反復睡眠潜時試験(MSLT)5,000点

- ◇ 反復睡眠潜時試験 (MSLT) は、ナルコレプシー又は突発性過眠症が強く疑われる患者に、診断の補助として、概ね2時間間隔で4回以上の睡眠検査を行った場合に1月に1回を限度として算定する。なお、本検査と終夜睡眠ポリグラフィーD237を併せて行った場合には、主たるもののみ算定する。

D238 脳波検査判断料 (脳波検査の種類、回数にかかわらず月1回算定) ……140点
〔神経・筋検査〕 (判断料140点: D241)

D239 筋電図検査

1. 筋電図 (1肢に、針電極には1筋に) ……200点
 2. 誘発筋電図 (神経伝導速度測定を含む) (1神経につき) ……150点
- 注. 「2」誘発筋電図は2神経以上に対して行う場合は、1神経増すごとに150点を加算するが、加算点数は450点を超えない。
- (1) 筋電図は顔面及び躯幹の場合に左右、腹背を問わずそれぞれ1肢増すごとに150点を加算するが、加算点数は450点を超えない。
 - (2) 誘発筋電図は感覚神経と運動神経とは別々に1神経として数える。

D239-2 電流知覚閾値測定 (一連) ……200点

D240 神経・筋負荷テスト…1. テンシロンテスト (ワゴスチグミン眼筋力テストを含む。) ……130点

D241 神経・筋検査判断料 (神経・筋検査の種類回数にかかわらず月1回算定) ……140点

〔耳鼻咽喉科学的検査〕

D244 自覚的聴力検査

D244 1. 標準純音聴力検査 ……350点

D244 1. 自記オーディオメーターによる聴力検査 ……350点

D244 2. 標準語音聴力検査 ……350点

- (1) 標準純音聴力検査は、日本工業規格の診断用オーディオメーターを使用し、日本聴覚医学会制定の測定方法で、気導聴力 (測定周波数250, 500, 1,000, 2,000, 4,000, 8,000 Hz) 及び骨導聴力 (測定周波数250, 500, 1,000, 2,000, 4,000Hz) を両耳に測定する方法をいう。

D244 2. ことばのききとり検査 ……350点

- (2) ことばのききとり検査は、難聴者の語音了解度を測定し、補聴器及び聴能訓練の効果の評価を行った場合に算定する。

D244 3. 簡易聴力検査

- イ. 気導純音聴力検査 (標準純音聴力検査で骨導聴力検査を行わない場合) ……110点
- ロ. その他 (種目数にかかわらず一連につき) ……40点
- (3) 簡易聴力検査は、室内騒音が30ホーン以下の防音室で行う検査である。
- (4) 簡易聴力検査で、「イ」は、日本工業規格の診断用オーディオメーターを使用して標準純音聴力検査時と同じ測定周波数について気導聴力検査のみを行った場合に算定する。
- (5) 簡易聴力検査で、「ロ」は、次のアとイを一連として行った場合に算定する。
 - ア. 音叉を用いる検査 (ウェーバー法、リンネ法、ジュレ法を含む。)
 - イ. オーディオメーターを用いる検査 (閉鎖骨導試験 (耳栓骨導試験)、日本工業規格選別用オーディオメーターによる気導検査を含む。)

編注: ウェーバー法 音叉を前頭部の真中に当て、音がどちらの耳に偏っているかを調べる。片耳の難聴で、患耳側→伝音障害。健耳側→感音障害。

リンネ法 音叉を乳様突起に当てて骨導が聞こえなくなったら、音叉を耳の穴に移動し気導を調べる。又、気導を検査してから、骨導を検査する。

気導が長い (気導>骨導) = リンネ陽性。

骨導が長い (骨導>気導) = リンネ陰性。

リンネ陽性→感音障害が正常。リンネ陰性→伝音障害。

28 耳鼻咽喉科検査

- D244 4. 後迷路機能検査（種目数にかかわらず一連につき）……………400点
(6) 後迷路機能検査は、短音による検査、方向感機能検査、ひずみ語音明瞭度検査、一過性閾値上昇検査（Temporary Threshold Drift：TTD）のうち、1種又は2種以上の検査を組み合わせで行う場合に、2種以上検査を行ってもこの点数で算定する。
- D244 5. 内耳機能検査（種目数にかかわらず一連につき）……………400点
(7) 内耳機能検査の点数は、レクルートメント検査（Alternate Binatural Loudness Balance：ABLB 法）、音の強さ及び周波数の弁別域検査、SISI（Short Increment Sensitivity Index）テスト等の内耳障害の鑑別に係るすべての検査の費用を含み、検査の数にかかわらず、この点数で算定する。
- D244 5. 耳鳴検査（種目数にかかわらず一連につき）……………400点
(8) 耳鳴検査は、診断用オージオメーター、自記オージオメーター又は耳鳴検査装置を用いて、耳鳴同調音の検索、ラウドネスの判定、耳鳴り遮蔽検査等を行った場合に算定する。
- D244 6. 中耳機能検査（種目数にかかわらず一連につき）……………150点
(9) 中耳機能検査は、骨導ノイズ法、鼓膜穿孔閉鎖検査（パッチテスト）、気導聴力検査等のうち2種以上を組み合わせで行った場合に算定する。
- D246 アコースティックオトスコープを用いた鼓膜音響反射率検査……………100点
◇ アコースティックオトスコープを用いて鼓膜音響反射率検査と耳鏡検査及び鼓膜可動性検査を併せて行い、リコーダーで記録を診療録に残した場合に算定できる。
なお、この場合の耳鏡検査及び鼓膜可動性検査の手技料は、この点数に含まれる。
- D247 他覚的聴力検査又は行動観察による聴力検査
- D247 1. 鼓膜音響インピーダンス検査……………300点
- D247 2. チンパノメトリー……………350点
- D247 3. 耳小骨筋反射検査……………450点
- D247 4. 遊戯聴力検査……………450点
- D247 5. 耳音響放射（OAE）検査
イ. 自発耳音響放射（SOAE）……………100点
ロ. その他の場合：誘発耳音響放射（EOAE）・結合音耳音響放射（DPOAE）……………300点
◇ 同一月中に、「イ」及び「ロ」の両方を行った場合は、「イ」の点数は算定できない。
- D248 耳管機能測定装置を用いた耳管機能測定……………450点
◇ この耳管機能測定で、音響耳管法、耳管鼓室気流動体法、加圧減圧法のいずれか又は複数により測定した場合に算定する。
- D249 蝸電図……………750点
- D244-2 補聴器適合検査（月2回に限り）
1. 1回目……………1,300点
2. 2回目以降……………700点
注. 補聴器適合検査は施設基準を地方厚生局に届け出る。
◇ 補聴器適合検査は、聴力像に電気音響的に適応と思われる補聴器を選択の上、音場での補聴器装着実耳検査を実施した場合に算定する。
(1) 医師の条件：補聴器適合検査の研修を終了した耳鼻咽喉科医師が1人常勤。
(2) 具備する装置：スピーカーによるオージオメーター、環境音発生装置、補聴器周波数特性測定装置
- D250 平衡機能検査
- D250 1. 標準検査（種目数にかかわらず一連につき）……………20点
(1) 標準検査は、上肢偏倚検査（遮眼書字検査、指示検査、上肢偏倚反応検査、上肢緊張検査等）、下肢偏倚検査（歩行検査、足ぶみ検査等）、立ちなおり検査（ゴニオメーター検査、単脚起立検査、両脚起立検査等）、自発眼振検査（正面、右、左、上、下の注

視眼振検査，異常眼球運動検査，眼球運動の制限の有無及び眼位検査を含む検査）をいい，数に関係なく，一連としてこの点数で算定する。

D 250 2. 刺激又は負荷を加える特殊検査（1種目につき）……………120点

(2) 刺激又は負荷を加える特殊検査は，次に掲げるものをいい，それぞれ検査1回ごとに点数を算定する。

ア. 温度眼振検査（温度による眼振検査）

イ. 視運動眼振検査（電動式装置又はそれに準じた定量的方法により刺激を行う検査）

ウ. 回転眼振検査（電動式装置又はそれに準じた定量的方法により刺激を行う検査）

エ. 視標追跡検査

オ. 迷路瘻孔症状検査

D 250 3. 頭位及び頭位変換眼振検査……………150点

(3) 頭位及び頭位変換眼振検査は，フレンツェル眼鏡下での頭位眼振及び変換眼振検査をいい，数に関係なく，一連としてこの点数で算定する。

D 250 4. 電気眼振図（一連につき）

イ. 皿電極により4誘導以上の記録を行った場合……………400点

ロ. その他の場合……………260点

(4) 電気眼振図を，眼球電位図（EOG）D 278と併せて行った場合は，主たる検査の点数のみを算定する。

D 250 5. 重心動揺計……………250点

ア. 重心動揺計は，荷重変動を測定する検出器と，この荷重信号を記録・分析するデータ処理装置から成る装置を用いて，めまい・平衡障害の病巣診断を行う。この検査は，これらの装置を用いて，重心動揺軌跡を記録し，その面積（外周・矩形・実効値面積），軌跡長（総軌跡長・単位軌跡長・単位面積軌跡長），動揺中心変位，ロンベルグ率をすべて計測した場合に算定する。

◇ 重心動揺計は，平衡機能検査の標準検査D 2501を行った上で，実施の必要が認められたものに限り算定する。

D 250 5. 下肢加重検査……………250点

D 250 5. フォースプレート分析……………250点

D 250 5. 動作分析検査……………250点

注. パワー・ベクトル分析加算……………+ 200点

イ. 注のパワー・ベクトル分析を行った場合の加算は，記録された重心動揺軌跡のコンピュータ分析を行い，パワー・スペクトル，位置ベクトル，速度ベクトル，振幅確率密度分布をすべて算出した場合に算定する。

注. 重心動揺計（刺激又は負荷加算）……………+ 120点

ウ. 注の刺激又は負荷を加えた場合の加算は，電気刺激，視運動刺激，傾斜刺激，水平運動刺激，振動刺激等姿勢反射誘発を加えてこの検査を行った場合に1種目ごとに算定する。

○ 重心動揺計の下肢加重検査，フォースプレート分析，動作分析検査は，あらかじめ標準検査を行う必要はない。 [疑義解釈H20. 7. 10]

○ 重心動揺計の下肢加重検査は，靴式足圧計測装置やシート式足圧接地足跡計測装置，プレート式足圧計測装置等の複数の装置を用いて計測した場合でも，一連の検査として，1回しか算定できない。 [疑義解釈H20. 7. 10]

○ 重心動揺計の下肢加重検査，フォースプレート分析，動作分析検査は，耳鼻科領域に限定されてはいないので，他科でも算定できる。 [疑義解釈H20. 7. 10]

D 245 鼻腔通気度検査……………300点

(1) 鼻腔通気度検査は，手術日の前後3月以内に行った場合に算定できる。診療報酬明細書の摘要欄に手術前には検査に関連する手術名及び手術実施予定日を，手術後には検

査に関連する手術名及び手術日を記載する。

- ◇ 手術に関係なく睡眠時無呼吸症候群又は神経性（心因性）鼻閉症の診断の目的で行った場合も点数を算定できる。

D253 嗅覚検査

D253 1. 基準嗅覚検査……………450点

- (1) 基準嗅覚検査は、5種の基準臭（T&Tオルファクトメーター）による嗅力検査である。

D253 2. 静脈性嗅覚検査……………45点

- (2) 静脈性嗅覚検査は、有嗅医薬品静注後の嗅覚感発現までの時間と嗅感の持続時間を測定する。注射手技科は、この点数に含まれる。なお、薬剤料は算定できる。

D252 扁桃マッサージ法……………40点

- ◇ 扁桃マッサージ法は、慢性扁桃炎に対する病巣誘発試験として行われた場合に算定する。

D254 電気味覚検査（一連につき）……………300点

- (1) 電気味覚検査は、検査の対象とする支配神経領域に関係なく一連として、点数を1回算定する。
- (2) 味覚定量検査（濾紙ディスク法）は、電気味覚検査D254により算定する。

D251 音声言語医学的検査

D251 1. 喉頭ストロボスコーピー……………450点

D251 2. 音響分析……………450点

- (1) 音響分析は、種々の原因による音声障害及び発音、構音、話しことば等の障害がある患者に、音声パターン検査又は音声スペクトル定量検査のうち的一方又は両方を行った場合に算定する。

D251 3. 音声機能検査……………450点

- (2) 音声機能検査は、嚥声等の音声障害に、発声状態の総合的分析を行う検査で、音域検査、声の強さ測定、発声時呼吸流の測定、発声持続時間の測定を組み合わせ、それぞれ又は同時に測定するものをいい、種類及び回数に関係なく、一連として1回算定する。

〔眼科学的検査〕

D277 涙液分泌機能検査（シルメル法等による涙液分泌機能検査）……………38点

D278 眼球電位図（EOG）（D250-4電気眼振図との併施は主のみ）……………260点

臨床心理・ 神経心理検査	1. 操作が容易 なもの 80点	2. 操作が複雑 なもの 280点	3. 操作と処理が 極めて複雑 450点
D283 発達及び 知能検査	津守式発達検査 遠城寺式発達検査	田中ビネー式知能検査 鈴木ビネー式知能検査 WISC WAIS	
D284 人 格 検 査	Y-G性格検査 パーソナリティイベント 東大式エゴグラム	バウムテスト 描画テスト P-Fスタディ SCT MMPI	ロールシャッハテスト TATテスト CATテスト
D285 その他の 心理検査	CMI調査表 CAS不安検査 SDS評価尺度 バンダーゲジュルトテスト	クレペリン精神検査 ベントン視覚記銘検査 三宅式記銘力検査	ITPA言語能力検査 標準失語症検査 WAB失語症検査 老研版失語症検査

注. D283～D285は、複数の検査を行っても、1種類のみの所定点数により算定する。

- (2) 医師自らが検査を行い、結果処理を行った場合のみ算定する。検査及び結果処理に「1」は40分以上、「2」は1時間以上、「3」は1時間30分以上を要する。

- (3) 診療録に分析結果を記載する。

〔負荷試験等〕D287内分泌負荷試験 3 甲状腺負荷試験, D288糖負荷試験 等一略

D291 皮内反応検査, 鼻アレルギー誘発試験, ヒナルゴンテスト, 過敏性転嫁検査

1. 21箇所以内の場合（1箇所につき）……………16点

2. 22箇所以上の場合（一連につき）350点

(1) 皮内反応検査は、ツベルクリン反応、各種アレルギーの皮膚貼布試験（皮内テスト、スクラッチテストを含む。）で、ツベルクリン、アレルギー等検査に使用した薬剤の費用は、D500の薬剤で算定する。

(2) 数種のアレルギー又は濃度の異なったアレルギーを用いて皮内反応検査を行った場合は、それぞれ点数で算定できる。

※ アレルギー治療エキスを及びアレルギーハウスダストエキスによるアレルギー疾患減感作療法で使用した薬剤料は、使用量（やむを得ず廃棄した場合の薬液量を含む）に応じて薬価により算定する。

編注：薬剤の1回の使用量は0.2ccを標準として、 $(16点 + \text{薬剤の使用量}/10) \times \text{抗原の種類}$ で点数を計算する。点数の限度を越えたら、薬剤料のみとなる。

（昭43. 9. 12 保険発92）

・診療録に薬剤を実際に使用した量と、廃棄した量を記載する。

(3) 薬物投与に当たり、あらかじめ皮内反応、注射等による過敏性検査を行った場合は、皮内反応検査の点数は算定できない。

※ 鼻汁喀痰中好酸球検査 [D005血液形態の3]

○ アレルギー性鼻炎に星状神経節ブロックは認められない。

[社会保険診療報酬支払基金審査情報提供事例 平成18年3月27日]

◎アレルギー保険点数表

参考資料：鳥居薬品株式会社 社内資料

A) 皮内反応検査

・薬剤の標準使用量を0.2mlとする。

・請求点数：皮内反応検査料＋皮内反応検査薬剤料

B) 減感作療法

・薬剤の標準使用量を0.2mlとする。

・外来の場合：皮下注射手技料＋減感作療法薬剤料

・入院の場合：皮下注射手技料は算定できなくて、減感作療法薬剤料のみです。

C) アレルギースクラッチ検査

・薬剤の標準使用量を0.05mlとする。

・請求点数：皮内反応検査料＋スクラッチ薬剤料

D) 鼻粘膜誘発試験

・請求点数：皮内反応検査料＋鼻粘膜誘発薬剤料

E) パッチテスト

・薬剤の標準使用量を0.05mlとする。

・請求点数：皮内反応検査料＋パッチテスト薬剤料

F) エオジノステイントリイ 好酸球染色：薬剤料は算定できない。

・請求点数：D017 3の検査料＋D005 3鼻汁喀痰中好酸球検査＋D026微生物学的検査判断料

D291-2 小児食物アレルギー負荷検査1,000点

注1. 施設基準を地方厚生局に届け出た医療機関で、9歳未満の患者に食物アレルギー負荷検査を行った場合に、年2回に限り算定する。

注2. 小児食物アレルギー負荷検査に係わる投薬、注射、処置の費用は点数に含まれる。

(2) 検査には、食物アレルギー負荷検査の危険性、必要性、検査方法、その他の留意事項を、患者又はその家族等に文書で説明した上で、交付すると共に、その文書の写しを診療録に添付する。

(3) 負荷試験食の費用は所定点数に含まれる。

(5) 「注2」の注射とは、注射実施料をいい、施用した薬剤の費用は、別途算定する。

D291-3 内服・点滴誘発試験1,000点

注. 施設基準を地方厚生局に届けた医療機関は年2回に限り算定できる。

- (1) 検査目的は貼付試験、皮内反応、リンパ球幼若化検査等で診断がつかない薬疹の診断で、入院患者に対して被疑薬を内服または点滴・静注した場合に限り算定できる。
- (2) 検査を行うには、内服・点滴誘発試験の危険性、必要性、検査方法及びその他の留意事項を、患者又はその家族等に文書で説明の上交付し、その文書の写しを診療録に添付する。

編注：薬疹の検査で最も信頼性が高いもので、通常量の1/100～1/10からはじめて徐々に量を増やし、反応がでた時点ですぐにやめる検査。

- 内服・点滴誘発試験の算定が年2回に限定とは、1回目から起算して1年以内に2回目算定できることである。2回目には前回算定月日の記載が必要となる。

[疑義解釈H22. 4. 30]

〔内視鏡検査〕

1. 超音波内視鏡検査実施加算(第3節「生体検査」の新生児・乳幼児の時は、算定できない) + 300点
2. D295～D323の内視鏡検査の同一月の同一検査は、2回目以降は90/100の点数……90/100
3. 他医療機関撮影内視鏡写真診断料は1回算定できる。(受診患者の時) ……………70点
4. 写真診断を行った場合は、使用したフィルムの費用として、購入価格を10円で除して得た点数を加算する。

- (3) 内視鏡検査に第11部「麻酔」を行った時は、麻酔の費用を別に算定する。
- (4) 麻酔手技料を算定できない時の薬剤は、D500「薬剤」により算定。…(P-15)/10+1
- (5) 処置又は手術と同時にに行った内視鏡検査は別に算定できない。
- (6) 内視鏡当日に検査に関連して行う注射の手技料は算定できない。
- 内視鏡検査時に、原則的にD012-1梅毒脂質抗原使用検査(定性)、D013-1HBs抗原、D013-5HCV抗体価精密測定は認められる。

[社会保険診療報酬支払基金審査情報提供事例 平成18年3月27日]

- (7) D295～D235の内視鏡検査は以下の項目より算定
 - ア. 生検用ファイバースコープ使用組織採取(内視鏡)(組織の数に拘らず)

1回の内視鏡検査について内視鏡下生検査法D414の点数を別に算定する。
 - イ. 互いに近接する部位を連続的にファイバースコープ施行は、主たる検査のみ算定。
 - ウ. 内視鏡検査をエックス線透視下に行った場合、透視診断料E000は算定できない。
 - エ. 写真診断は、フィルム代を加算(現像料郵送料を含む。撮影料・診断料は算定せず)F/10

D295 関節鏡検査(片側) ……………600点

D296 喉頭直達鏡検査 ……………190点

D296-2 鼻咽腔直達鏡検査 ……………220点

- (1) 鼻咽腔直達鏡検査は、嗅裂部・鼻咽腔・副鼻腔入口部ファイバースコープD298と同時に行った場合は算定できない。

D298 嗅裂部・鼻咽腔・副鼻腔入口部ファイバースコープ(部位を問わず一連) ……………600点

- (1) 嗅裂部・鼻咽腔・副鼻腔入口部ファイバースコープは、嗅裂部・鼻咽腔・副鼻腔入口部の全域にわたって一連の検査として算定する。

D298-2 内視鏡下嚥下機能検査 ……………600点

- (1) 嚥下機能が低下した患者に、喉頭内視鏡等で直接観察下に着色水を嚥下させ、嚥下反射惹起のタイミング、着色水の咽頭残留及び誤嚥の程度を指標にして嚥下機能を評価した場合に算定する。
- (2) D298嗅裂部・鼻咽腔・副鼻腔入口部ファイバースコープ及びD299喉頭ファイバースコープを2つ以上行った場合は、主たるものののみ算定する。

D299 喉頭ファイバースコープ ……………600点

D300 中耳ファイバースコープ ……………240点

D300-2 顎関節鏡検査(片側) ……………1,000点